

はばかりながらかぶ おんぎよくのうわさ
憚乍歌舞音曲之囀

二 村 文 人

○先号のこの欄に書いた観劇記が一部で好評だったのに味をしめて、年末年始の芝居巡りを……。

○12月14日(水) 夏に思いがけず入院・手術を経験し、四十日程ベッドで過ごしたが、その予後の検査で戸山町の国立病院医療センターへ。かつてグアム島から帰った横井庄一さんで有名になったところだ。いつもながら混んでいて、レントゲン一枚撮るのに半日かかる。

昼過ぎ、国立小劇場へ駆けつける。文楽鑑賞教室『壺坂観音霊験記』50分。先月関西であつた学会の帰途、本物の壺坂寺を訪ねたばかりなので殊更印象が深い。明治期の初演、

名人豊沢団平の作曲と言うが、やはり古いものに比べるとどこか味わいが違う。簗助のお里は熱演。

引き続き夜の部『忠臣蔵』。今宵は討入り、何か景品でも付かかと思しみにしていたが特になし。歌舞伎で見慣れた『忠臣蔵』と文楽ではずいぶん演出が異なる。三段目の「刃傷」で判官が師直に斬りつけたあと、舞台を右左と追いかけて回すところ、九段目の「山科閑居」で座敷の上手と下手が反対になっている。逆勝手などが珍しい。由良之助は大抜擢の玉松が遣う。本蔵の文吾、戸無瀬の文昇、お石の紋寿共々地味ながらこれからの文楽の中心的存在だ。

○16日(金) 国立劇場の歌舞伎『伽羅先代萩』。一兩年にわかに体力の衰えを感じさせるようになった歌右衛門おそらく一世一代の政岡である。前月歌舞伎座の『京鹿子娘』。人道

成寺』、芝翫がいかに軽々と踊る一方で、白拍子花子が蛇身の本心の凄味を見せたのは、まさに演者歌右衛門自身の執念ではなかったか。『飯焚き』は、別の日に観た同僚がひとりして目が覚めたらまだ飯が焚けていなかつたと苦笑していたが、これだけ行き届いてしかも緊張感の漂う『飯焚き』はほかにあるまい。権十郎初役の八汐も好評だった。仁木弾正は吉右衛門。「床下」など相変らずスケールの大きさは抜群だが、最近の吉右衛

門は何を演つても世話がかつて見えるところがある。むしろ幸四郎で観たい気がした。一時期ミュージカルに傾斜して、歌舞伎に関しては弟に一步を譲ると言われた幸四郎のこのころ時代物に示す実力は、かえつて進境著しいものがある。

○18日(日) 本誌の取材を口実に、前夜愛用の寝台急行「銀河」で東京を発ち、7時前京都に着く。まだ時間が早いので四条から三条まで鴨川べりを歩く。チドリの群れ遊ぶ水面が朝日にきらめいて歳末の慌しさを忘れるが、さすがに底冷えがして耳が痛いほどだ。一句詠もうと思ふけれども、あまりに情景が整いすぎて、かえつて案が浮かばない。河原町通りへ出て、本能寺に立ち寄り、老舗六曜社で熱いコーヒを啜る。

南座に着くともう入口は人でいっぱいだ。三階下手の棧敷。六人入れ込みで、奈良から来たという若いOL三人組と中年の女性二人が一緒。人の頭が邪魔になって、立ち上らないうと舞台も花道もなかなか見えない。10時開演。○『双蝶々曲輪日記』の「角力場」50分と「引窓」70分。富十郎の濡髪に我当の放駒。秀太郎の与五郎が良い。こういう上方の若旦那の持ち味は東京の役者にはない。「引窓」は

扇雀初役の南与兵衛に宗十郎の女房と上村吉弥の母。顔見世らしい配役だ。『双蝶々』をこんなに楽しく見せてくれる上方歌舞伎の人達にもっと活躍の場がほしい。好成绩をあげた富十郎も扇雀も、そして夜の部の延若も皆かつて武智歌舞伎で鍛えられた。不本意な晩年だった武智鉄二のこれは立派な遺産と言つていい。○『勸進帳』75分。孝夫の弁慶に菊五郎の富樫と勘九郎の義経。昔から、またかの関とと言われるほど上演回数が多いものだが、南座でも三年連続。一年中歌舞伎をやつていゝ東京ならまだしも、関西の客はこれで満足なのだろうか。○『堀川波の鼓』80分。お目当てる仁左衛門休演で、彦九郎は我当が代わる。十一月の国立劇場「桐一葉」で、私が観た翌日片桐且元役の仁左衛門は脳梗塞で倒れてしまい、正直なところ再起は難しいと思つてた。それが幸い経過も良く、或は今日あたりから復帰かと期待したのだがかなわなかった(後日談になるが、最後の三日間元気に舞台上に立ち、顔見世連続出演記録をまた一年更新した)。我当頑張る。○『奴道成寺』40分。三つの面をとつかえひつかえして踊り分ける趣向といい、猿之助の観客を充分に意識した所作といい、大切りにはふさわしいかも知れ

ない。

○落語の聴き納めは、ここ数年立川談志ひとり会と桂米朝独演会に決まつてしまつたが、今年も9日談志の「芝浜」と、25日米朝の「らくだ」を堪能する。

○新年は4日に歌舞伎座の初芝居「芝翫」の「重の井子別れ」。ようやく芝翫に番が回つてきた。6日に本牧亭の講談初席(トリの小金井芦州が「寛永三馬術」の愛宕山の件りを御機嫌で読む)といつものとおり過す。

○1月7日(土) 天皇陛下崩御。昼前所用で出かけたついでに上野界限を自転車で走る。本牧亭は二日間休席昨日行つておいてよかつた。鈴本演芸場は営業、但し落語協会の小さん会長と圓歌副会長が喪に服して休演、苦肉の策か。聞くところでは、出囃子や奇術のBGMを控えたそうだ。染之助・染太郎はさぞ困つたことだろう。

さすがに「停止」という言い方こそしなかつたものの、「歌舞音曲」は「自粛」を求められた。歌舞音曲——戦後四十年を過ぎ、間もなく二十一世紀を迎える時代に、この言葉はやはり生きていた。

歌見世のハネて八坂に灯のともり
年暮る、談志の語る「芝浜」に